

[研究ノート]

新学習指導要領と中学校歴史教科書

— 全体・導入・近世部分の比較を中心に —

若 松 正 志

要 旨

この研究ノートは、新しい学習指導要領のもと、現在日本で使われている中学校の歴史教科書8点を比較・分析し、それらの特色と活用について論じたものである。

文部科学省は平成29(2017)年に、中学校の学習指導要領を改訂した。それを受け、新しい教科書が編集された。中学校の歴史教科書は、これまで8点が検定に合格し、全国の中学校で使われている。それらは、学習指導要領に準拠しているが、細かく見ると特色がある。ここでは、この新しい学習指導要領の要点を述べたうえで、8社の教科書について、全体・導入・近世部分を比較・分析し、それらの特色と活用について気づいた点をまとめた。

はじめに

この研究ノートは、現在日本の中学校で使われている歴史教科書8点¹⁾を比較・分析し、それらの特色と活用について論じるものである。

現在の日本の学校教育は、教育基本法・学校教育法を踏まえ、文部科学省がおよそ10年ごとに改訂する、学習指導要領をもとに行われている。現在の学習指導要領²⁾は、小学校・中学校が平成29(2017)年、高等学校が平成30(2018)年に改訂された(その要点は後述する)。これらの新学習指導要領による教育は、小学校が平成31(令和元・2019)年度から、中学校は令和2(2020)年度から、高等学校は令和3(2021)年度から実施されている。

この新学習指導要領の改訂にあわせ、新しい教科書が必要になる。日本の場合その多くは、いわゆる教科書会社が大学の教員や学校現場の教員に執筆を依頼し、教科書が作成(編集)され、文部科学省の教科書検定にかけられ、それに合格したものが各都道府県や市町村の教科書選考委員会・教育委員会、私立学校の教科書選定の委員会などで選考・採択され、学校現場で使用されることになる³⁾。

中学校の歴史教科書については、令和元(平成31・2019)年度の教科書検定には9社が申請し、7社が合格(2社が不合格)、令和2(2020)年度には2社が申請、1社が合格(1社が不合格)、令和3(2021)年度には1社が申請・不合格となり、現在8社の教科書が使用され

ている⁴⁾。ここでは、これら8社の歴史教科書を比較・分析し、それらの特色を述べることにする。

なお、このような歴史教科書の比較・分析は、これまでも様々行われている⁵⁾。たとえば、教科書採択の現場では、各社の教科書がどのような特色を持つかを検討し、資料を作成するなどして、どの教科書にするかを決めている⁶⁾。また、歴史教科書特有の問題として、歴史認識の問題がある。単純化していえば、日本の過去の植民地支配や戦争の反省・否定のうえに国際協調・平和教育を重視する立場と、過去の植民地支配や戦争も含め自国（日本）を肯定的にとらえ愛国心を育てようとする立場があり⁷⁾、教科書採択において、異なる立場の教科書に対して、それぞれ調査し批判を行っている場合もある。各都道府県・市町村・私立学校などの現場における教科書の検討・評価、様々な立場からの教科書の検討・評価、それらについて過去のものも含め、すべてを把握したうえで論じようとする、調査対象が際限なく広がり、收拾がつかなくなることは明らかである。ここではそのような立場・議論・資料が存在することを指摘したうえで、大学で「社会科教育法」を担当する一教員として、文部科学省及び教科書会社の基本資料を中心に（具体的には行論の中や注で説明する）、まずは新しい学習指導要領の要点を述べ、その後、8社の歴史教科書について、概要・特色、導入部分、近世部分を中心に比較・検討を行い、その特色と活用について私見を述べることにする。

1 新しい学習指導要領と歴史教育に求められているもの

最初に、今回新しくなった学習指導要領の内容（要点）をまとめておく⁸⁾。

新しい学習指導要領全体のキーワードとして、「生きる力」がある。これは、平成18（2006）年の教育基本法の改正の後、平成20（2008）年の学習指導要領改訂⁹⁾の時に登場したものである。この時の改訂では、それ以前の「ゆとり教育」を改め、授業時数が平均して約10%増えた。社会科についてはこの時、学習を充実させるとし、歴史の授業時数も、それまでの105時間（1（単位）時間は45分）から130時間へと約3割近く増えている。なお、授業時数については、今回の学習指導要領では、歴史は135時間とさらに増えた。

次にあげるべきことは、育成を目指す資質・能力が「3つの柱」として明確に整理されたことである。「3つの柱」とは、①基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得（知識及び技能）、②「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力、判断力、表現力等」の育成（思考力、判断力、表現力等）、③主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成（学びに向かう力、人間性等）であり、これが授業を設計する際の基本になり、また生徒を評価する際の基準にもなるものであり、課題の解決を通して、上記の「3つの柱」の内容の獲得を目指すことになっている。

また、今回の改訂では、「主体的・対話的で深い学び」が求められている。社会科についていえば、いわゆる暗記（知識）中心から思考力・判断力・表現力等の重視へとシフトしており、そのために生徒に問いを投げかけること、興味を持たせ調べさせること、グループワークなどのアクティブ・ラーニングが重要になってきている。そして教科書も、このような点を意識して作られている。

なお、今回の学習指導要領は、前回のものと比べ、分量が増えている点にも注意しておきたい。新旧対照表¹⁰⁾を見ると、その違いが明らかである。たとえば、前回の学習指導要領にはなかった「社会科 歴史的分野」全体の目標が「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す」と明記されたことをはじめ、学ぶ内容に関する具体的な指示も増え、踏みこんだ内容になっているのである。

2 8社の歴史教科書の概要と導入部分について

(1) 8社の教科書の概要

それでは、8社の歴史教科書の概要を見ることにしよう。

まず教科書会社についてあらためて述べると、清水書院が撤退し、山川出版社と令和書籍が新規参入した（ただし令和書籍は現時点（2022年11月）でも検定不合格である）。

表1は、学習指導要領があげている歴史的分野の構成（目次）と8社の教科書の目次を比べ、さらに令和3年度の各教科書の採択率¹¹⁾を加えたものである。基本的には、各社の教科書とももちろん、学習指導要領を踏まえて作成されている。教科書の大きさは、ほとんどがAB判（縦257mm・横210mm）、学び舎はA4判（縦297mm・横210mm）である。サイズが大きい方が、レイアウトの制約も少なくなり、写真や図版、表・地図・グラフなどを沢山入れることができる。また、すべての教科書が全ページほぼフルカラーである（索引部分は二色刷りが多い）。

次に、8社の歴史教科書それぞれのねらいを見るために、各社が作成した「編修趣意書」の「編修の基本方針」を比較する¹²⁾。ここからは、各社の教科書作成のスタンスの違いが垣間見える。ポンチ絵・図・写真、キャッチコピーなどで、この教科書を通してどのような人を育てたいか、ここではわかりやすく書かれていると思う順にあげる。日本文教出版は「新しい時代を担う主権者を育てる」を教科書作成の基本理念としている。教育出版は、「持続可能な社会を創造する市民の育成」を編修の柱としている。育鵬社は、「国民としての自覚をもって国際社会で主体的に生きる力を育てる！」を基本方針とし、「よき日本人として地域社会を支え、日本と国際社会に貢献できる、たくましい未来の主人公を育成するための教科書」としている。自国を強調するスタンスである。東京書籍は、「今を問い、未来をともに拓く力」を育てると

表1：中学校歴史教科書の比較（全体・導入）

学習指導要領	東京書籍 歴史 705 295 頁	教育出版 歴史 706 298 頁	帝国書院 歴史 707 292 頁
	新しい社会 歴史	中学社会 歴史 未来をひらく	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き
A 歴史との対話	第1章 歴史へのとびら	第1章 歴史のとらえ方・調べ方	第1部 歴史のとらえ方と調べ方
B 近世までの日本とアジア			第2部 歴史の大きな流れと時代の移り変わり
B (1) 古代までの日本	第2章 古代までの日本	第2章 原始・古代の日本と世界	第1章 古代国家の成立と東アジア
B (2) 中世の日本	第3章 中世の日本	第3章 中世の日本と世界	第2章 武家政権の成長と東アジア
B (3) 近世の日本	第4章 近世の日本	第4章 近世の日本と世界	第3章 武家政権の展開と世界の動き
C 近現代の日本と世界			
C (1) 近代の日本と世界	第5章 開国と近代日本の歩み	第5章 日本の近代化と国際社会	第4章 近代国家の歩みと国際社会
	第6章 二度の世界大戦と日本	第6章 二度の世界大戦と日本	第5章 二度の世界大戦と日本
C (2) 現代の日本と世界	第7章 現代の日本と私たち	第7章 現代の日本と世界	第6章 現在に続く日本と世界
令和3年度の採択率	52.5	11.4	25.2

したうえで、現代的な課題との関連などもあげ、さらに教育基本法の「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」の育成にもふれている。帝国書院は、「人々の多様性を踏まえた社会の成長を考えていける教科書」としている。学び舎は、文章中心でややわかりにくい、この教科書の問いや学び合いを通して、「国際的視野に立ち、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な公民的資質を備えるべき、第一歩」としている。これらに対し、山川出版社は、教育基本法の第2条の1～5号との関連でいろいろあげているが、柱となる方針は書かれていない。自由社は、教育基本法との関連では、「『思考力、判断力、表現力』等を養う」という個別的な方針をあげるにとどまっている（学習指導要領に関わっては、「我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚」を涵養することに役立つ歴史教科書）を目指すとしている）。

次に教科書会社が行うサポートについて、ICTの活用も含めて考えることにする。教科書会社は以前から、教科書を踏まえた教師用指導書（学習指導案、板書案、小テストなどが掲載されている）を作成し、それを参考にしてもらうことで、教員になったばかりの人でも、授業が

表1 (つづき)

山川出版社 歴史 708 288 頁	日本文教出版 歴史 709 317 頁	育鵬社 歴史 710 302 頁	学び舎 歴史 711 299 頁	自由社 歴史 712 300 頁
中学歴史 日本と世界	中学社会 歴史的分野	最新 新しい日本の 歴史	ともに学ぶ 人間の歴史 中学社会 歴史的分野	新しい歴史教科書
第1章 歴史との対話	第1編 私たちと歴史	序章	歴史への案内	序章 歴史のとらえ方
		第1部	第1部 原始・古代	
第2章 古代までの日本	第2編 古代までの日本と世界	第1章 原始と古代の日本	第1章 文明のはじまりと日本列島 第2章 日本の古代国家	第1章 古代までの日本
第3章 中世の日本	第3編 中世の日本と世界	第2章 中世の日本	第2部 中世 第3章 武士の世	第2章 中世の日本
第4章 近世の日本	第4編 近世の日本と世界	第3章 近世の日本	第3部 近世 第4章 世界がつながる時代 第5章 百姓と町人の世	第3章 近世の日本
	第5編 近代の日本と世界	第2部	第4部 近代	
第5章 近代の日本と国際関係	第1章 日本の近代化	第4章 近代の日本と世界	第6章 世界は近代へ 第7章 近代国家へと歩み日本	第4章 近代日本の建設
第6章 二つの世界大戦と日本	第2章 二度の世界大戦と日本	第5章 二度の世界大戦と日本	第5部 二つの世界大戦 第8章 帝国主義の時代 第9章 第二次世界大戦の時代	第5章 二つの世界大戦と日本
			第6部 現代	
第7章 現代の日本と世界	第6編 現代の日本と世界	第6章 現代の日本と世界	第10章 現代の日本と世界	第6章 現代の日本と世界
1.7	7.7	1.1	0.5	-

スムーズにできるような支援策をとっていた。近年では、そのことが教科書の採択につながることも、教科書のサポートをかなり手厚く行っている会社もある¹³⁾。そしてまた、すでに訪れている情報化時代に対応するために、ICTを活用する（コンピュータやタブレットなどの電子機器を活用する）工夫も行われている。特に、新型コロナウイルスの流行がきっかけとなり、自習も念頭に置き、積極的にICTを活用する動きがでてきているように思う。以前は、関連する博物館のホームページのURLを教科書に載せる形が多かったように思うが、今はQRコードなどの2次元コードを教科書のいくつかのページにつけ、関連資料を見ることができるような工夫をしているものがかなりある（東京書籍、教育出版、帝国書院、日本文教出版など）。しかも、その多くは自社の管理するホームページにコンテンツを置く形である。コンテンツの多さなどは未確認だが、評価して良いだろう。この点、育鵬社・学び舎・自由社がやや出遅れた感じである（山川出版社は、博物館などへのリンクの2次元コードがある）。

(2) 教科書の導入部分

次に各教科書の導入部分を比較する。

表紙の見返し部分についてみると、国宝や重要文化財（東京書籍）、伝統行事や祭り（帝国書院）、日本の世界遺産（山川出版社、自由社）など、各社カラー写真を使い、生徒の興味をひく工夫がみられる。また、現代の私たちと関わることがらの歴史をまとめているものもある（東京書籍、教育出版、日本文教出版）。

表1でA「歴史との対話」にあたる部分の最初は、小学校での学びも意識しながら、歴史の大きな流れを最初に扱っているものが多い。東京書籍は、「歴史へのとびら」（pp.6・7）として、原始時代から現代まで、イラストでそれぞれの時期を代表する人物・出来事・文化などを、時にセリフも入れながら、描いている。古代・中世・近世・近代・現代など、時代で背景の色を変えている点（章と対応）も良いと思う。日本文教出版の「小学校で学んだ主な人物と文化遺産」（pp.6・7）もほぼ同じスタイルが良い。帝国書院の「歴史をたどろう」（pp.0・1）もこれらに近いが、時代の色分けがない点、セリフがない点など、少し見劣りする。教育出版の「歴史の流れをとらえよう」（pp.2・3、折り込み）は、クイズもところどころ（マス）に入った歴史すごろくがある。時代で色を変えている点も良い。育鵬社は、「歴史の流れと先人の活躍」（pp.8・9）としているが、「小学校で学んだ人物とその似顔絵」に関しては42人の羅列（一応時代順）になっている。最初が読み物的なものとしては、学び舎の「歴史と出会う－6月23日、沖縄で」（pp.4・5）が、沖縄戦に関する追悼行事から始めている。これらに対し、山川出版社と自由社は、年代や史料などの説明的な導入になっていて、生徒の興味をひきつけるには十分ではないように思う。

このほか、導入部分に関しては、地域や人物を中心に、調べ学習について記しているものが多い。今回の学習指導要領で重視している、調べ学習への対応という点では、教科書のどこかで、テーマの設定、調査方法（書籍・インターネット・博物館・フィールドワーク）、考察、まとめ方、発表の仕方などについて説明する必要があるが、全体の導入部分で説明するものと、学ぶ時代・地域に即した学習のところで説明しているものがある。私見では、全体の導入部分で一通り説明している、教育出版のものが良くできていると思う。

3 8社の歴史教科書の近世部分について

次に、8社の歴史教科書の近世部分を比較・検討する。今回、近世の部分を取り上げることにしたのは、筆者の専門であり、専門的な見地からコメントしやすいことによる。なお、前掲『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』も、文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 社会』（同、2020）も、具体例として近世の部分を取り上げていること（前者はpp.87～89、後

者は pp.62～71)、そしてこの時代は、アジアに加えヨーロッパとのつながり（関係）がでてくること、さらに近現代ほどなまなましい戦争を扱うわけではなく、外国との関係のある程度、距離を置いて見るができるという点もある。

(1) 近世部分の構成（目次）

まず、近世部分の構成（目次）について、表2をみよう。全体的には8社でそれほど大きな違いはない。学習指導要領の構成通り、(ア)「世界の動きと統一事業」を1節でまとめたケース（東京書籍、日本文教出版、自由社）と、2節に分けるケース（教育出版、帝国書院、山川出版社、育鵬社）、次の(イ)「江戸幕府の成立と対外関係」にあたる部分もあわせて1節にまとめたケース（学び舎）がある。学び舎以外は、(イ)で1節設けている。(ウ)「産業の発達と町人文化」・(エ)「幕府政治の展開」については、両者をまとめて1節とするケース（東京書籍、教育出版、学び舎、自由社）、2節とするケース（帝国書院、山川出版社、日本文教出版、育鵬社）がある。節のタイトルについてみると、学習指導要領の(エ)は「幕府政治」としており、「藩」が見えない点が気になる。教科書でも節の題で「幕藩」を使っているのは、山川出版社だけである。さらに、節のタイトルで注目されるのが、学び舎である。第3部を「近世」とし、前述の第4章が「世界がつながる時代」、第5章が「百姓と町人の世」と、幕府も藩も武士もタイトルには登場しないのである。民衆を重視していることの表れといえようか。このほか、本文ページの中にコラムを入れたり、独立ページでコラムを作ったり、育鵬社の鳥の目と虫の目（マクロな見方とミクロな見方）など、各社様々な工夫が見られる（表2「その他」欄参照）。

(2) 近世部分の導入とまとめ

次に、近世のはじめ（導入部分）と終わり（まとめ）の部分についてみる。他の時代についてもそうだが、東京書籍の導入（pp.98・99）とまとめ（pp.144～147）が優れている。具体的には、導入部分では、近世の日本に関する絵画資料（様々な身分の人の活動、特徴的なことから）や年表（小学校で習った人物も掲出）をあげながら、p.99の右下で第4章の探究課題、第4章の各節（1～3）の課題が明示されていて、まさにこれから学ぶ内容の導入となっている。そして、まとめの部分では、学習の振り返りとして、問題（選択・記述・穴埋め・論述）に取り組みながら、年表で新たに学んだことを確認し、各節の課題に答え、その後章全体の探究課題に答えるようになっている。そしてさらに「近世で最も活躍した身分はどれだろう」という問いにマトリックス（表）やピラミッドストラクチャを使い、根拠・理由をあげての主張ができるようにする工夫がなされている。帝国書院は、導入のページがなく、章の問いと第1節の問い、1項の学習課題が来る。2節以降の課題が最初に見えない点が残念である。まとめ（pp.146・147）は穴埋めと時代の特色を説明できるような手順が示されており、良い。教育出

版は、最初のページ (p.95) に章全体に関わる課題が書いてあり、続いて絵画資料 (pp.96・97) を分析するようになっている。各回 (項) の課題はそれぞれのところで記されているが、章全体、各節の課題は見えにくい。まとめ (pp.142~144) は、年表・地図・表の穴埋め、図の説明から、近世の特色を考える形になっている。日本文教出版も、教育出版に近い形の導入で (pp.106~111)、章全体の「めあて」を記したうえで、絵画資料を分析する形で始まっている。各回 (項) の課題はそれぞれのところで明示している。まとめ (pp.156・157) は年表・地図に関する問題に取り組みながら、グラフの分析なども行い、近世の特色を考えることになっている。育鵬社は「歴史絵巻」 (pp.104・105) として、この章に出てくる人物や出来事をあげる形で始まり、やはり絵画資料に関する問いがいくつか提示されている。そして各項では、

表2：中学校歴史教科書の近世部分の比較

文部科学省	東京書籍 歴史 705	教育出版 歴史 706	帝国書院 歴史 707
学習指導要領	新しい社会 歴史	中学社会 歴史 未来をひらく	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き
B (3) 近世の日本	第4章 近世の日本 (50頁)	第4章 近世の日本と世界 (50頁)	第3章 武家政権の展開 と世界の動き (54頁)
(ア) 世界の動きと統一 事業	1節 ヨーロッパ人との出 会いと全国統一 (7項)	1節 結びつく世界との出 会い (4項)	第1節 大航海によって 結びつく世界 (3項)
(イ) 江戸幕府の成立と 対外関係	2節 江戸幕府の成立と対 外政策 (5項)	3節 幕藩体制の確立と鎖 国 (5項)	第2節 戦乱から全国統 一へ (3項)
(ウ) 産業の発達と町人 文化	3節 産業の発達と幕府政 治の動き (7項)	4節 経済の成長と幕政の 改革 (6項)	第4節 天下泰平の世の 中 (4項)
(エ) 幕府の政治の展開			第5節 社会の変化と幕 府の対策 (3項)
導入	概要、絵画、年表、課題 (章・節) (2頁)	概要、絵画、年表 (3頁)	問い (0頁)
まとめ	問題・課題解答、表、図、 説明 (4頁)	年表、地図、説明 (3頁)	年表、地図、説明 (2頁)
その他	資料から発見! (2頁)、 もっと歴史 (2頁)、地域 の歴史を調べよう (2頁)	歴史を探ろう (6頁)、身 近な地域の歴史を調べよ う (2頁)	タイムトラベル (4頁)、 多面的・多角的に考えて みよう (2頁)

それぞれの課題（問い）が記されている。そして、まとめ（pp.152・153）では、年表・地図の穴埋め・選択問題、グラフ・絵画資料の分析・内容説明などを通して、近世の時代的特色を考えるようになっている。山川出版社は年表と絵画資料での導入。各項で2つ程度の問いが記されている。まとめ（pp.152・153）は、地図や表に取り組むが、生徒に説明の文章を書かせるスタイルのものが多く、自由社は、最初のページ（p.105）に絵画資料と年表（小学校で学んだ人物も確認）をあげ、絵画資料については、その後、コラム（p.143）で扱われている。そして各回（項）の課題は、それぞれのところに記されている。まとめ（pp.144～148）は、調べ学習、復習問題、さらにいくつかの問題に取り組むことを通して、時代の特徴を考える形になっている。学び舎は、最初（pp.86・87）で近世全体の学習課題をあげ、第4章「世界が

表2（つづき）

山川出版社 歴史 708	日本文教出版 歴史 709	育鵬社 歴史 710	学び舎 歴史 711	自由社 歴史 712
中学歴史 日本と世界	中学社会 歴史的分野	最新 新しい日本の 歴史	ともに学ぶ 人間の 歴史 中学社会 歴史的分 野	新しい歴史教科書
第4章 近世の日 本（52頁）	第4編 近世の日 本と世界（52頁）	第3章 近世の日 本（52頁）	第3部 近世 （50頁）	第3章 近世の日 本（44頁）
1節 一体化へ向か う世界（3項）	1節 中世から近世 へ （6項）	第1節 ヨーロッパ との出会い （2項）	第4章 世界が つながらる時代（8 項）	第1節 世界の動き と日本の統一事業 （6項）
2節 近世社会の成 立（4項）		第2節 信長・秀吉 の全国統一 （3項）		
3節 幕藩体制の確 立（4項）	2節 江戸幕府の成 立と東アジア（4 項）	第3節 江戸幕府の 政治（4項）		第2節 江戸幕府の 政治（5項）
4節 幕藩体制の展 開（3項）	3節 産業の発達と 元禄文化（2項）	第4節 産業・交通 の発達と町人文化 （3項）	第5章 百姓と町 人の世（12項）	第3節 産業の発達 と町人文化 （4項）
5節 幕藩体制の動 揺（5項）	4節 幕府政治の改 革と農村の変化 （3項）	第5節 幕府政治の 改革（6項）		
概説、絵画、年表 （2頁）	絵画資料、前史、 地図、年表（6頁＋ 綴じ込み）	海洋国家日本の歩 み、歴史絵巻、絵 画資料、グラフ（5 頁）	海でつながる世界、 学習課題、世界遺 産に見る世界（4 頁）	絵画資料・登場人 物紹介（小学校） （1頁）
地図、表への記述、 説明（2頁）	年表、地図・グラ フ、表への記述、 説明（2頁）	年表、地図、絵画 資料、グラフ、討 論（2頁）	年表、地図、絵画 資料、インタビュー、 説明、発表（2.5頁）	復習問題、時代の 特徴を考える、対 話とまとめ図（3 頁）
*世紀の世界（4 頁）、歴史を考えよ う（2頁）、歴史へ のアプローチ（2 頁）、地域からのア プローチ（2頁）	でかけよう！地域 調べ（2頁）、チャ レンジ歴史（2頁）	このころ世界は（2 頁）、歴史ズームイ ン（4頁）、歴史の ターニングポイント （2頁）、なでし こ日本史（1頁）	歴史を体験する （3.5頁）	外の目から見た日 本（2頁）、コラム （もっと知りたい、 人物クローズアッ プ）（6頁）、調べ学 習（2頁）

つながる時代」・第5章「百姓と町人の世」それぞれの最初は世界の交易・人の移動、世界遺産（大建築）を取り上げている。各回の課題はそれぞれのところで述べられているが、検定意見¹⁴⁾を見ると、問いの作り方は、当初かなり問題があったようである。なお、4章のまとめ（pp.104・105）は年表・地図の穴埋めと絵画資料のインターネットでの調査、5章のまとめ（pp.134・135）は年表の穴埋めとグループディスカッションを踏まえた発表、そして近世全体のまとめとして説明文の作成や仮想インタビュー記事の作成などとなっている。

全体として、導入については、各社工夫が見られるが、近世全体の課題と各節の課題が最初に出てくる東京書籍がわかりやすいと感じた。また、まとめについても、各社とも今回の学習指導要領に対応し、単なる問題への解答（知識の確認）にとどまらず、地図・表・グラフを活用した作業、文章化（説明させる）など、技能や思考力・判断力・表現力に関わる内容を含んでいるといえる。

(3) 近世部分の内容

近世部分の内容については、一見するとそれほど大きな違いはないようであるが、細かく見ると見解が異なる叙述が見られる部分もある。

たとえば、イベリア勢力（ポルトガル・スペイン）の進出とキリスト教の禁止、秀吉の朝鮮侵略（出兵）については、現在でも歴史研究者間で見解が異なるところがある。イベリア勢力や宣教師たちは日本侵略の意図をもっていたか、秀吉が伴天連追放令を出した理由は何か、秀吉が明に侵攻しようとした理由は何かなど、まだまだ確定していない。今後の研究の進展を注視しつつ、教科書叙述の展開を見守りたい。

今回の学習指導要領で重視されているアイヌの文化については、多くの教科書が松前藩によるアイヌの支配（交易）と抵抗（シャクシャインの蜂起）などにはふれているが、アイヌの文化そのものについてふれているのは、東京書籍の「アイヌ文化とその継承」（pp.140・141）や帝国書院の「琉球とアイヌの人々の暮らし」（pp.120・121）が大きく取り上げ、日本文教出版や学び舎が本文中で具体的にふれている程度であった（琉球については中世で扱われている教科書が多い）。

また飢饉や百姓一揆については多くの教科書で取り上げられているが（からかさ連判状やグラフ）、自由社はその団体交渉的な面を描いている。

その他、気になった点をいくつか述べる。

学び舎は、興味深いエピソードをいろいろコラムとして載せているが、教科書の叙述から最終的に何を考えさせようとしているのか、良くわからないものが多い。たとえば、「ザビエルとアンジロー」というコラム（p.93）では、ザビエル来日のカギとなったアンジローとの出会いが具体的に記されているが、その最後はアンジローが「人を殺してマラッカに逃げていた薩摩の商人で、ザビエルに従って日本にもどったのち、倭寇の一員として姿を消したと伝えられ

る」としている。当時のアジアの「倭寇的状况」を描きたいのだろうか、すっきりしない終わり方である。これを大学の歴史の授業で扱うならば、岸野久氏の研究¹⁵⁾を踏まえ、アンジローが登場する各種資料の比較とそれらの信頼性の検討、当該期におけるアンジローの評価など、いろいろ展開が考えられるが、中学生を対象に教材化し、教科書の叙述を批判的に扱うことになるので、正直なかなか大変だと思う。また同じく学び舎の教科書にある「朝鮮の武将となった沙也可」というコラム (p.99) では、加藤清正の家臣の武将「沙也可」が、秀吉の朝鮮侵略のなかで朝鮮側に降伏し、朝鮮軍の一員として日本軍と戦ったこと、朝鮮国王から金忠善という名をもらったことなどが書かれているが、日本軍撤退後おこった民衆の反乱（朝鮮の重税賦課に抵抗）に対し、弾圧の先頭にいたことが記されている。ある程度史実や研究成果を踏まえたものであるが、運命のいたずら・悲しさを感じさせるエピソードとなっており、こちらもどう扱えば良いか、悩むところである。これも、大学の歴史の授業であれば、北島万次氏や貫井正之氏の研究¹⁶⁾を参照し、「沙也可」に関する資料の紹介、日本が韓国を併合した時期にはそのような裏切り者はありえないとその存在が否定されたことなど、史学史的にも興味深い内容の授業ができそうだが、やはり中学校の授業として展開するのは難しいと思う。この教科書を使って中学校で授業をするには、教師に相当な力量と準備が求められそうである¹⁷⁾。

最後に些末なことかもしれないが、育鵬社 (p.121)・自由社 (p.121)に見られる「江戸初期」の大名配置図の問題点にふれておきたい。これは、寛文4 (1664)年の徳川家綱による寛文印知をもとに記されたものであるが、両社はこれを「江戸初期」としている。「江戸初期」はせいぜい寛永期 (1624~44年)までであろう。1664年で「江戸初期」とするのは明らかに違和感がある。これは両社の前身にあたる扶桑社の『新しい歴史教科書』の頃から、20年以上もそのままである¹⁸⁾。

おわりに

以上、新学習指導要領の内容にふれたうえで、現在の中学校歴史教科書8点について、全体・導入・近世部分を中心に比較・分析し、考えたことを述べてきた。今回の学習指導要領では、かなり具体的に教える内容なども指示しており、それに沿った教科書の作成が行われていること、しかしそれでもそれぞれに違いや工夫があることを示すことができたと思う。

東京書籍が50%以上のシェアを持っていることは、章・節の課題の示し方が優れていることがひとつの要因だと思う。このようなスタイルは、教科書に沿って授業を進める場合や生徒に自習させる場合にはありがたい工夫である。教科書を教えるのか、教科書で教えるのかは、古くから議論があるところである¹⁹⁾が、教師をめざし、これから実践経験を積む学生たちには、まずは教科書（に書かれていること）をしっかり教えられるようになり、次のステップとして教科書を素材に、生徒の興味をひき、考えさせる授業ができるようになってほしいと思う。

こう考えると、教科書会社による手厚いサポートを取り入れること自体は良いことであり、そのためにも ICT スキルを磨くことが重要になってくるが、それに頼りすぎ、過度の依存になってはいけない。大学における「教科教育法」の授業に即していえば、模擬授業などで経験を積む²⁰⁾こと以上に、将来のことを考え、教材研究にもっと力を入れるべきだと思う。少なくとも、現在の教科書記述の背景にどのような研究成果があるかは、押さえられるようになってほしいと思う。そのような点も意識して、今後「社会科教育法」の授業を展開していきたいと思う。

注

- 1) 8点の歴史教科書については、表1を参照されたい。東京書籍、教育出版、帝国書院、山川出版社、日本文教出版、育鵬社、学び舎、自由社の8社のものである。本稿では、自由社を除く7社については令和3年度使用教科書を、自由社については市販版『検定合格 新しい歴史教科書』を使用した。また、本文では、各教科書について、教科書会社名で記述し(下線も付した)、内容に関してはそのページ数を()に記すことで、注の煩を避けることにした。
- 2) 学習指導要領については、今回の改訂のポイントも含め、文部科学省「学習指導要領「生きる力」」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)が詳しい。中学校の社会科に関しては、文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 社会編』(東洋館出版社、2018。https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_003.pdf)がある。また、解説書としては、原田智仁編著『平成29年版 中学校 新学習指導要領の展開 社会編』(明治書院、2017)、工藤文三編著『平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 社会』(ぎょうせい、2018)、時事通信出版局編『平成29年3月告示 中学校学習指導要領完全対応 授業が変わる! 新学習指導要領 ハンドブック 中学校社会編』(時事通信社、2017)などがある。
- 3) 文部科学省「教科書」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/main3_a2.htm)参照。教科書及び教科書制度などについて記されている。
- 4) 文部科学省「教科書検定結果」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/kentei/kekka.htm)参照。ここ数年の検定結果の概要、検定意見書などを見ることができる。
- 5) 筆者はかつて、「近世史研究の視点から」(原田敬一・水野直樹編『歴史教科書の可能性 ―「つくる会」史観を超えて―』(青木書店、2002)において、平成13(2001)年度の教科書検定を通った中学校歴史教科書8点(東京書籍、教育出版、大阪書籍、帝国書院、日本書籍、清水書院、日本文教出版の検定合格(見本)本、扶桑社の市販本)に関する分析を行っている。現在と比べると、教科書会社もいくつか変わったが、歴史の授業時数が少なかった。20年前の状況を扱ったものであるが、本稿と関わる部分もあるので、参照いただければ幸いである。
- 6) たとえば京都市では、令和3～6年度の中学校での使用教科書について、京都府地区中学校教科書選定委員会が、調査・研究を行い、答申を出している(<https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000274527.html>)。歴史教科書については、<https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000274/274527/shakairekishu.pdf>に、選定の観点、調査研究の結果の概要、観点別・視点別評価、観点別資料からなるA4判21枚にわたる答申が作成されている。

- 7) たとえば、前者の立場の団体としては「子どもと教科書全国ネット21」が、後者の立場の団体としては「新しい歴史教科書をつくる会」がある。
- 8) ここでの主な参考資料は、注2にあげたものである。
- 9) 文部科学省「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf) 参照。
- 10) 教育出版「[中学校社会] 学習指導要領新旧対照表」(https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/chuu/shakai/files/cos13_btv01.pdf) 参照。
- 11) ここでは、『教科書レポート』編集委員会編『教科書レポート』No.64（日本出版労働組合連合会、2021）p.69のデータによる。
- 12) 検定に合格した教科書の「編修趣意書」は、採択の際の参考資料として、文部科学省のホームページに掲載されている。令和元（2019）年度の検定に合格した7社（東京書籍・教育出版・帝国書院・山川出版社・日本文教出版・育鵬社・学び舎）の教科書については、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/tenji/mext_00003.html に、令和2（2020）年度の検定に合格した1社（自由社）の教科書については、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/tenji/mext_00012.html にある。
- 13) 各教科書会社のホームページを参照。
- 14) 文部科学省「(2020年4月) 令和元年度 検定意見書」(https://www.mext.go.jp/content/20200410-mxt_kyokasyo02-000006416_4.pdf) 受理番号31-32が、内容から見て、学び舎の教科書への意見書である。
- 15) 岸野久『ザビエルの同伴者 アンジロー — 戦国時代の国際人 —』〈歴史文化ライブラリー〉（吉川弘文館、2001）では、アンジローの知力や能力、鹿児島を離れた理由などについて、宣教師の資料を比較・検討し、肯定的な評価を行っている。
- 16) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』〈日本歴史叢書〉（吉川弘文館、1995）の「プロローグ」、貫井正之『豊臣・徳川時代と朝鮮 — 戦争そして通信の時代へ —』（明石書店、2010）の第1部第6章「沙也可考」など、参照。中村栄孝氏の先駆的・実証的な研究（中村栄孝『日鮮関係史の研究』中（吉川弘文館、1969）参照）の存在、沙也可の子孫たちの動きなど、興味深い論点を多数あげている。
- 17) この点で、学び舎の教科書は、採択率は低いが、筑波大学附属中学校や灘中学校など、いわゆる超難関校（進学校）で使われていることを指摘しておく。
- 18) 『市販本 新しい歴史教科書』（扶桑社、2001）p.128。この点は、注5の拙稿（p.90）で指摘している。
- 19) 今野日出晴「『正直いって、教科書は使ってません』（安田常雄・吉村武彦編『テーマ別検証 歴史教科書大論争』〈別冊歴史読本〉（新人物往来社、2001）は、この2001年段階の状況を述べたうえで、教科書叙述の検討と授業実践の往復運動の重要性を主張している。2022年段階でも、新たな状況のもとでの議論は必要だと思う。
- 20) 筆者は、学生の模擬授業については、それを録画・提供し、生徒役の学生からのコメントとともに、振り返りをする際の材料としている。これについては、引き続き行うつもりである。

The new curriculum guidelines and history textbooks of junior high school:

A comparative study of the approved textbooks on overall content, introduction,
and the description of early modern Japan

Masashi WAKAMATSU

This essay compares and analyzes eight history textbooks of junior high school currently in use under the new curriculum guidelines in Japan and discusses their respective characteristics and usage.

Since 2017, when the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology revised its curriculum guidelines for junior high schools, several history textbooks have been edited and updated in response. Eight textbooks have already been approved by the government and are now used in junior high school classrooms nationwide. While all conform to the new curriculum guidelines, distinct features can be discerned on close inspection. After outlining the new curriculum guidelines, this comparative survey covers eight textbooks published by eight different companies, focusing on their overall content, introduction, and chapters on early modern history, and summarizes their respective characteristics and usage.